

壁画・鈴木ヒラクさん

「とわふる」で異色のコラボ

建築・藤本壮介さん

対談要約

地域交流センターは、正面の箱状の部分が建物っぽく見えるが、屋根のない大きな中庭になっている。現代美術館が白い箱状の展示室になっていて、一方でアート広場は完全に屋外。そうすると、白い箱なんだ

日常的かつ特別な場に

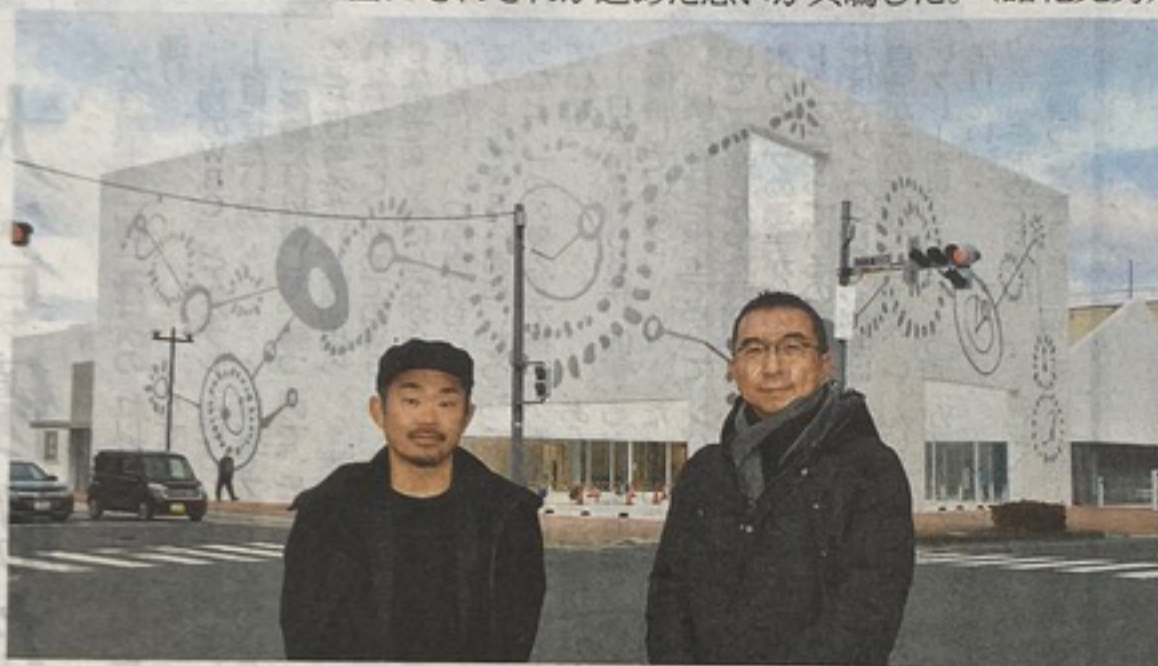
きな中庭になっている。現代美術館が白い箱状の展示室になっていて、一方でアート広場は完全に屋外。そうすると、白い箱なんだ

へふじもと・そうすけ 1971年北海道生まれ。建築家。藤本壮介建築設計事務所代表。東京大学工学部建築学科卒。2007年度日本建築大賞。14年仏モンペリエ国際設計競技など国際コンペ最優秀賞多数。25年大阪・関西万博の会場デザインプロデューサー。

街と中庭 仕切ってつなぐ

十和田

十和田市の市地域交流センター「とわふる」は、ともに世界的に活躍する建築家・藤本壮介さん(51)＝東京都在住＝とアーティスト・鈴木ヒラクさん(44)＝神奈川県在住＝の共同制作の場となった。中心街に屹立する白い外壁は、その上に描かれた壁画によってどんな意味を帯びたのか。両氏は昨年12月に市現代美術館で対談、建築と壁画にそれぞれが込めた思いが共鳴した。(館花光秀)



とわふるを背に立つ藤本壮介さん(右)と鈴木ヒラクさん＝2022年12月11日、十和田市稲生町の交差点

けれども屋外のスペース、交差点なんじゃないか、そこにあると、今の状況、この施設の意図すべきところなんじゃないかと思ってしまう。完全にオープンな広場にするのもよかったが、壁で囲むことによって、屋内の展示スペースのように見えたか。また、市民に開かれた、自由に使え、屋外の大きな部屋はないかとも考えた。

とわふるは昨年9月、現代美術館がある官庁街通りと中央商店街との交差点にオープンした。高さ約12メートルの壁に囲まれた、広さ約600平方メートルの中庭が特色。壁には四角い開口部が三つあり、そこから街並みが絵のように見える。屋根はなく空に向かって開かれている。11月にメタリックシルバーで描かれた壁画は、縄文時代の環状列石と星座から着想され、手描きの線と線からなる。

両氏とも、とわふるの立地場所を意識。中庭を完全にオープンな広場にできなかったことについて藤本さんは「アートと市民の活動が共存し、市民の日常の場所であると同時に異世界とつながるような特別な場所」をつくりたかったと説明した。鈴木さんは中庭に初めて入ったときの印象を「新しい外」と表現し、壁画は「古代の人々が集った環状列石と現代の人々の交流センター」という場所を重ねた。

対談はウェブ会議形式で行われ、進行役の鷗田めぐる館長は「対極的に見える直線的な建物と手描きのドローイングが重なり、内と外をわらかく仕切りながらつながっているという状況に、建物がグレイドアップされた」とまとめた。

対談要約

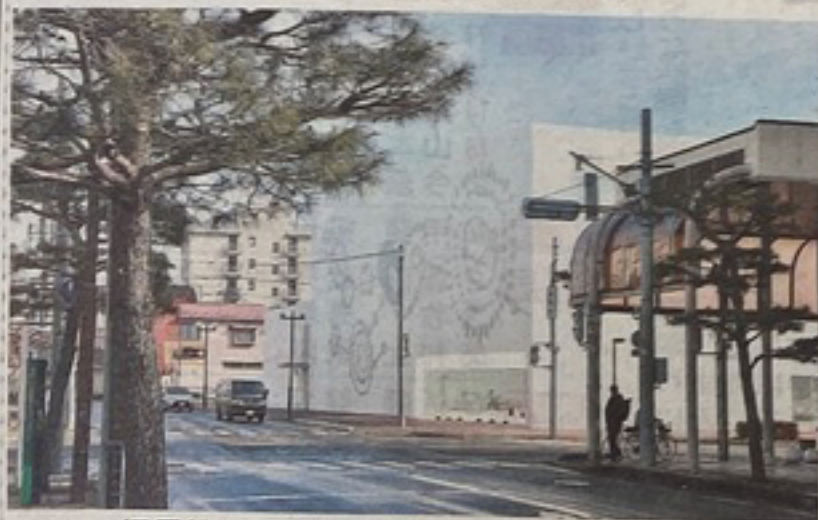
ドローイングをやって、内と外とか、光と闇、人間と非人間、そういう対極を

未来に向け新しい遺跡

線をつなぎ直すというところを考えた。考古学と宇宙科学に関心があり、過去と未来に広がる未知の領域をつなぐ通路としてドロー

インクがある。十和田の近くには縄文時代後期につくられた小牧野遺跡と大湯環状列石という日本有数の規模の環状列石

のモチーフになった環状列石のこと。惑星という意味も込めた。光は太陽の光だ。つまり、それを反射する惑星の軌道とか星座の線を指す。フランスのラスコー洞窟など古代の壁画を今見る



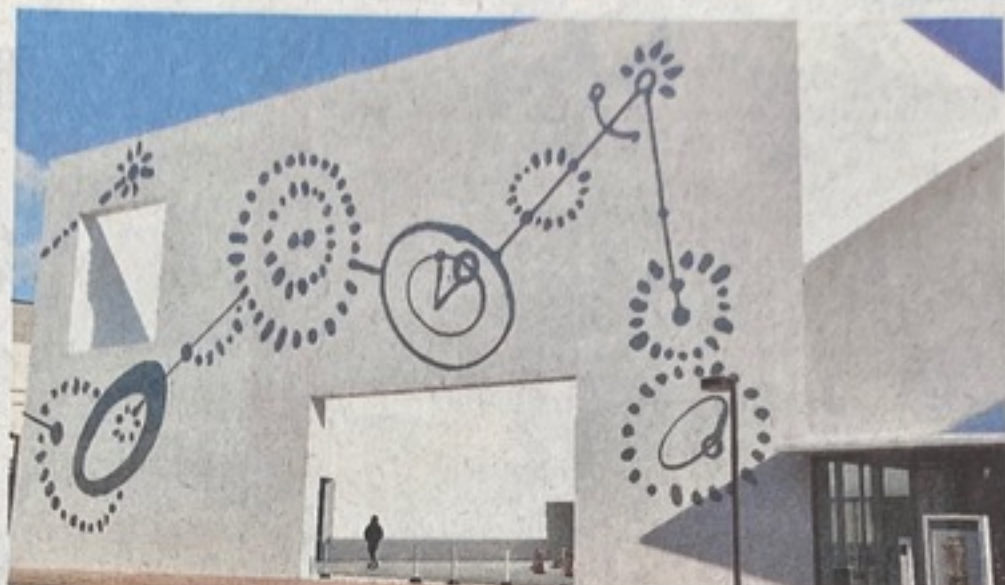
信号機や電線、街路樹の線ともつながっているような感じを抱かせる外壁の壁画



真っ白な壁の中庭。街並みも空も直線的に区切られ、「新しい外」が広がる

白壁にきらり「光と遊ぶ石」

とわふる壁画完成 鈴木さん制作



【写真上】壁画が完成した「とわふる」。写真左側が北、右側が西の壁。十和田市稲生町【同下】とわふる西側の壁画。同じ時間帯でも見る位置によって線の濃淡ががらりと変わる

十和田

十和田市の中心街にある市地域交流センター「とわふる」に、縄文時代に造られた環状列石と星座をモチーフにした壁画が完成した。道路に面した白い外壁に銀色の円環状の模様が浮かび上がり、市民らの目を引いている。（館花光秀）

環状列石と星座から着想



鈴木 ヒラクさん

タイトルは「光と遊ぶ石たち」。縦12メートル、横約26メートルの2枚の壁に、いっばいに幾つもの輪が広がり、線でつながっている。制作者は、東京芸術大学大学院准教授でアーティストの鈴木ヒラクさん（44）＝神奈川県在住。考古学に関心を寄せる鈴木さんが即興で描いたドローイングの作品で、市の公募で選ばれた。青森市の小牧野遺跡や秋

田県大湯の環状列石から着想を得た。壁画制作は11月上旬に始まり、同28日に完成。作品を拡大してシートで型を作り、メタリックシルバーの吹き付け塗装をした。今月10日、とわふるで行われた完成式典に出席した鈴木さんは「時間帯や季節によっていろいろな表情を見せる、動的な揺らぎを保ち続ける壁画だと思う。長く親んでいただければ」と述べた。

とわふるは建築家の藤本壮介さん（51）＝東京都住居が「アートのまちのリビング」をコンセプトに設計し、今年9月にオープン。大小のギャラリーやキッチンスペース付きの多目的室などがあり、市現代美術館と連動した、にぎわいの拠点として活用が期待されている。

棋王戦挑戦者決定戦は変
連勝した。

藤井五冠は、佐藤九段に2

「世界は既に線にあふれている」。言われてみればそうなのだが、新鮮な響きだった。

十和田市地域交流センター「とわふる」の壁画を制作したアーティスト・鈴木ヒラクさんが、作品解説の中で話していた。例えば街なかなら建物の輪郭、電線、道路の白線、植物の線などと。人の動きもしかり。

とわふるが建つ一角は、現代美術館（アート）がある官庁街通りと商店街（暮らし）が交差する、まさに市の中心地。ドローイング作家の鈴木さんはその外壁に、縄文時代の環状列石と星座から着想した作品を描いた。人々が集い、未知の領域とつながる場との思

東奥春秋

新しい外

いが込められている。

白くて高い壁に囲まれたとわふるの中庭は、降り注ぐ光を集めて一層明るく感じる。光を反射するシルバーの壁画は、表情が刻々と変化する。光を市民と置き換えれば、そこは、市民が集うことによって輝きを増し、さまざまな情報を発信する場になるといえようか。

中に入ったと思ったたら外だった。そんな不思議な感覚を抱かせる建築の中庭を、鈴木さんは「新しい外」と表現した。コロナ禍で途切れた線をつなぎ直し、気づかなかった線を見つけて紡ぎ、新しい外をつくる。新年を、そんな年にしたい。

(T)

2022.12.28



29(木) 30(金) 31(土) 1(日) 2(月) 3(火)

29日 赤口

旧12月7日



きのう(27日)

最高 7.0 平年 3.2

ENJOY 観る 聴く 創る

あおもりアート探訪 ▶ 16

十和田市現代美術館から
官庁街通りに沿って5分ほど歩いたところに、9月、十和田市地域交流センター（とわふる）が開館しました。建築家藤本壮介が設計したユニークな建物です。官庁街通りと中央商店街の交差点に面していて、中庭があります。普通なら、交差点に面した部分を開けた広場にするのですが、藤本はこの広場を大きな白い壁で囲いました。屋根はかけられていないので屋外なのですが、壁に囲われていることによって、求心的な場が生まれています。一方、中庭に立つと、壁に穿たれた窓のような開口部を

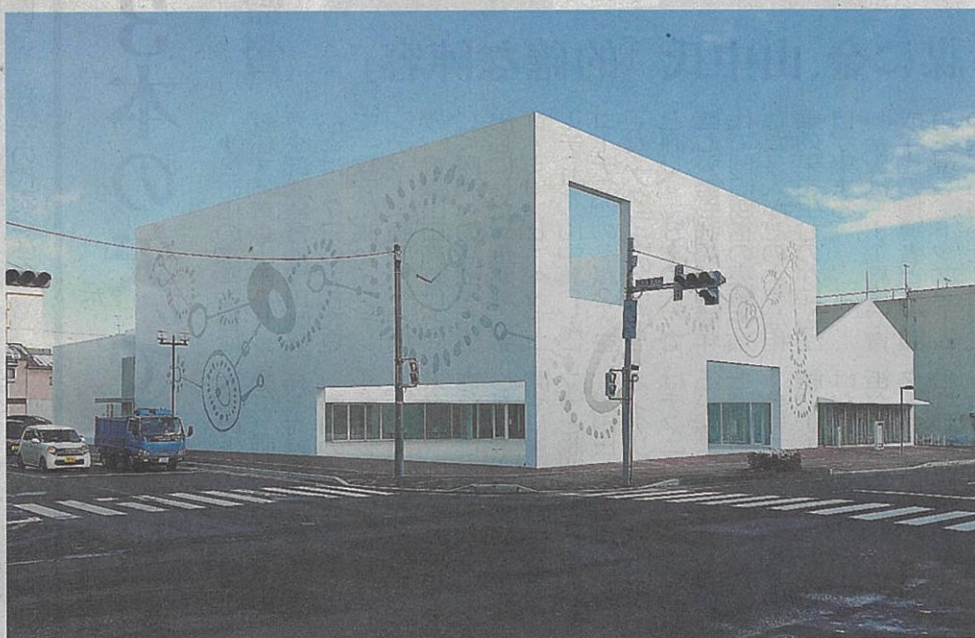


呼応する建築と壁画

通してアーケードや店の看板など、街の様子が目に飛び込んできます。

藤本はこれまでも、公共建築や住宅で内と外が曖昧な空間を積極的に設計してきました。明確な境界を持たず、周囲と相互に浸透し合うような空間です。この曖昧さには、地域交流センターが地元の市民が使うための施設であるとともに、遠方から十和田市現代美術館などに訪れる人と出会う場にもなっていきたいという意図も込められています。

この特徴的な壁に、先月、アーティスト鈴木ヒラクの壁画が完成しました。銀色で描かれた点が円環状に並び、円同士が線で繋がっています。手で描かれた太めの線を拡大したもので、柔



対極的な意味を繋げる

らかな手の揺らぎが現れつつも、銀色で光を反射することから未来的な硬質さも感じさせます。

構想にあたって鈴木は、青森市の小牧野遺跡や秋田

十和田市地域交流センターに描かれた鈴木ヒラクの壁画「光と遊ぶ石たち」

県大湯の環状列石から着想を得ました。縄文時代後期につくられたこれらの環状列石は、多くの石が地面に二重、三重の円を描くように並んでいます。お墓や、人が集まり儀式を行う場所であったといわれています。

また、この壁画には、星座のイメージも重ねたと鈴木は言います。光を反射する銀色で描かれていること、円同士が線で結び付けられていることは、星座のイメージから出てきた色やかたちかもしれない。物質性のない光と質量を持つ石という対極的な二つが重ね合わされています。

完成した壁画を見て、この壁画の意味が建物の中庭の意味と繋がっている点が目白押しと感じました。鈴木は壁をただ自分の絵のための「キャンバス」として使っているわけではありませ

ん。藤本の設計した、閉じられつつも開かれた中庭の意味を読み解き、それを環状列石という人が集まる場の痕跡と繋げているのです。環状列石には日時計の役割を果たしていたものもあったといい、そこが空に向かって開かれた場だったとすれば、藤本の中庭とも呼応します。

鈴木は、自ら設計した現在の十和田の街から構想され、直線によって構成された真っ白で現代的な藤本の中庭が、想像力によって遠く古代へ、空へ、宇宙へと繋がられます。

藤本は、自ら設計した大きな穴の空いた壁や天井に囲われた住宅について「廃墟となつて壁と屋根の一部だけが残った太古の構築物に人間が住み着いた場所のよう」とも述べています。時として優れた美術は時空を超えた飛躍を可能にしてくれます。

（十和田市現代美術館館長）
※この連載は毎月第2金曜日に掲載します。